



TITLE:

田島先生追懷斷片録

AUTHOR(S):

山本, 美越乃

CITATION:

山本, 美越乃. 田島先生追懷斷片録. 經濟論叢 1934, 39(2): 282-284

ISSUE DATE:

1934-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130481>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會

經濟叢論

第二號

第三十九卷

昭和九年八月一日發行

(禁 轉 載)

哀 辭

故田島博士近影及署名
故田島博士原稿及京大弓道々場における博士

論 叢

骨牌税に就きて

供給曲線の性質

時 論

輸出統制の諸問題

研 究

貨幣的景氣論史

金物價と貨幣價值安定

アダム・スミスの廉價即豊富論

記 事

田島博士逝く

故田島博士年譜及著書論文目錄

追憶文

織田 萬

河田 嗣郎

汐見 三郎

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

神戶 正雄
本庄 榮治郎
黒 正 巖

山本 美越乃
小島 昌太郎
田 島 順

財部 靜治
大國 壽吉
石川 興二

法學博士 神戸 正雄

文學博士 高田 保馬

經濟學博士 谷口 吉彦

經濟學士 柴 田 敬

經濟學士 松岡 孝兒

經濟學士 白杉 庄一郎

田島先生
追懷斷片錄

山本美越乃

故田島先生に就て思出での一端を寄するやうにとの
依頼のあつた時直ちに自分の胸中に浮んだ事は、人各
々觀る所に異にするから自分の思出でが誤て先師に禮
を失するが如きことがあつてはと、一時躊躇したので
あるが、併し又退て考へる時は自分の思出でが他の人
の夫れと異なる所があれば、却て各方面から先師の全
貌を偲ぶ一助ともならうと思ひ、請はるゝ儘に所感の
一端を綴ることゝした。

京都帝國大學に法科大學が開設されたのは明治三十
二年で、其第一回生として入學した自分等數十名の者
は當時米國歸りの新進の學者と稱せられた兒玉亮太郎
氏（後に大學を辭して原敬氏の秘書官となつたが不幸にして
早世された）から經濟原論を學んだのであるが、之より
先き『最近經濟論』の名著を以て名聲囂々たる田島先生
が遠からず來任されると云ふ事を聞き、一同は鶴首其
日の一日も速かに來らんことを待望したものである。
先生が歐洲留學を了へて我が大學の講壇に立たれたの
は開校の翌年即ち三十三年からであつて、當時の法科
大學に於ける經濟財政に關する學科は殆んど先生の獨
壇場たるが如き觀があつた、後に先年物故された戸田
教授とか現在尙ほ健在に講壇に立つて居らるゝ神戸教
授の來任を見たが、自分等は其講義に接する機會を多
く持たぬ内に社會に送り出された、夫故に初代の法科
大學生の經濟財政に關する智識の多分は先生の直傳で
あり又それが總てゝあつたと稱しても敢て過言でな
い。明治三十年に其初版を公にされた『最近經濟論』は、

之より遙か以前に浮田和民氏によりて譯されたラーネッド氏の『經濟學之原理』等と共に當時の經濟學徒の耽讀措かざる所のものであつたが、就中『最近經濟論』は此種の著述中最高峰たる地位を占めて居つた。

先生は少年時代三島先生の二松學舎に學んで漢學の造詣頗る深く、諸子百家の典籍に精通して居られた所から、其文章は簡潔然かも含蓄に富める名文を以て綴られ、専門の智識以外に其名文に依りて啓發せらるゝ所も決して尠くなかつた。此漢學の素養が然らしめたものであるか先生は最近に至る迄口語體の文章を好まれず、口語體は冗長にして無用の文字を羅列するに過ぎざる文章界の邪道であると言はんばかりに之を排斥して居られた。談偶々文章論に及ぶと口語體の文章を指摘して『予をして筆を執らしめば之を二分の一乃至三分の一に短縮するは易々たるのみ』と話されたことさへあつた。併し最近は幾分此の如き考へ方を改められたものであるか、自ら口語體に近き論文をさへ公にされて居たようである。

先生が智の人であつたことは周知の事實で今更之を事新しく述べるまでもないが、同時に情に厚く又意志の非常に強固な人であつたと云ふことを看過してはならぬと思ふ。

先生の情誼に厚かつた一例として自分の今尚ほ記憶に新なる一事は、故東京帝國大學名譽教授金井延博士は先生の東大在學中の恩師であつた關係もあらうが常に之を尊敬して居られ、又金井博士も先生の事を斷えず念頭に置いて居られたやうで、自分が明治三十六年に大學を出て直ちに大阪高等商業學校に奉職一年餘にして文部省より海外留學を命ぜられて上京せんとした時、先生は金井博士に紹介の勞を執られ且久瀾を謝する旨の傳言を託された、上京早速博士を訪問した所、博士は『田島君から君の事を聞いたから本年は東大出身者中より自分の推薦せんとした留學生候補者の申出を見合せた』と云ふことを其話中に挟まれた。此事を耳にして自分は、兩先生間の情誼の濃やかなることに衷心より敬服した。先生自ら躬を以て情誼の重んずべ

追憶文

きを示された所から、門下生又は先生の知遇を受けたる者の中に適ま情誼を顧みざるが如き行動を爲す者のある時は、人一倍之を憤慨せられたようである。

一方に於ては此の如く情の人であつたと同時に他方に於ては又強き意志の人であつた、即ち一度自己の信念に訴へて或事を決心された以上は之を貫徹せずんば止まぬと云ふ風があつた、之が爲に時には測らざる誤解を招かるゝが如きことさへあつたが、併し何等私心を挟まざる公明正大なる意見を吐露せられた後は、恰も光風霽月の如く胸中一點の蟠まりを藏せられなかつた。

江戸に生れ、江戸に育ち、江戸に教育を受けられた先生は、其半生を雅やかな京洛の地に送られたが、比叡の威、加茂の流れも稜々たる先生の氣骨を如何ともする能はず、結局生粹の江戸兒として又實に國士の典型として終生其面目を全ふせられた。